



少女寫生

休暇後

みちよ

「あなた随分お倦けなすつたわねえ、本

當に黒いつたら無い事よ。」

「アラ、あなただつて随分お黒いわ、私

初めて目撃した時、全く人違ひした位よ

だつて眼ばかりキラキラ光らしてらつし

やるんですもの。まるでニグロの顔。」

「ニグロ、まあ酷い、私がニグロならあ

なたはインヂヤンだわ。」

「好いわ何だつて、だけ共私もう一海

水浴なんてこり／＼だわ、真黒になるん

ですもの。」

「然うよ全く、だから私来年からは山に

したいと思つてよ。」

「え、山が好いわ、温泉私大好き。」

「然うねえ、遊も好いわ、山口さんね、

軽井澤へ旅行つたんでせう、碓氷峠の泉

つたら何とも云へない好いところだつて

それに白百合が一採咲いて、其景色の好

い事つたら、おと行き度い。」

某女學校圖書館前で、斯うした話をし

て居た二人は、ふと数層館わきの小道を

登つて此方へ来る一人を見つけて、

「アラ山口さんよ、山口さん！」

二人は總れしげに身を振はせて、手招

きして早く早くと呼びかけるのでした。

と先方でもいそ／＼と小走りして来て、

「探してたのよ、だれだもまあ好かつた

事、私もう／＼お目に掛れないで了ふの

かと思つて悲しかつたわ」さしきみりし

た調子で、ついほろりとなる、二人は不

思議相に、

「まあ如何したのよ山口さん、もうこれ

つきり迷へない何のつて、一体如何した

のよ、私解らないわ、斯うして歸つて來

て、又御一緒に勉強するんぢやありません

んか。」

「え、ただと私思ふ違つちふんです

もの……。」

「え？」

煙草を杖ついて登つてゐた山口さ

んの顔を覗き込んだ二人は、

「何だつてまあ、本當？、え山口さん、

本當なの？」

「何處か他へ御歸校？」

「否、父が死つたもんですから……。」

「アラ何時？、まあ！」

暫くは三人共言葉もなく、押黙つて唯

山口さんの鼻をすする音だけが際立つて

聞えた。

「本當にや氣の毒ねえ、御病死？」

「え、腸炎血……母が脚病でね輕井澤へ轉

地して私も附添つて行つてましたの、其

所へ急病だつて電報でせう、私もう……

慟ろいて了つて……。」

「然うでせうさねえ、それでこれから

如何なさるおつもり？」
「仕方がないから私交換局へでも勤め
やうと思つてますの。」
「……お可哀想だわねえ。本當に山口さ
んお察し申してよ。」
三人は互に手をとつて泣き入るのであ
つた。（完）

明日の献立

夕	煮魚
夜	味噌汁
朝	味噌汁
昼	味噌汁

相食のしを話美若夫の多ののの衰へ